第１章　上越市の概要

１－１　上越市の概要

（１）位置

上越市は、新潟県の南西部に位置し、北東から南西にかけて日本海に面しています。北東から東にかけては柏崎市と十日町市に接し、南東から南西にかけては長野県飯山市と妙高市に、西は糸魚川市に接しています。

古くから西と東、海と山を結ぶ交通の要衝であり、古代には北陸道の駅がおかれ、中世から近世には北前船の寄港地や加賀街道と北国街道の分岐点として栄えました。現在も重要港湾である直江津港を有し、北陸自動車道と上信越自動車道が結節するほか、JR 北陸本線、JR 信越本線、ほくほく線などの鉄道が接続しています。さらに、北陸新幹線や上越魚沼地域振興快速道路などのプロジェクトも進行するなど、陸・海の交通ネットワークが整った地方都市です。

（２）地勢と気象

上越市は、平成 17 年 1 月 1 日に当時全国で最多となる 13 町村と合併し、東西に約 44.6 ㎞、南北に 44.2 ㎞、面積は約 973k ㎡になりました。これは、東京都の面積の約半分にあたります。

広い平野部には関川、保倉川、矢代川、飯田川をはじめ多数の河川が流れており、平野北端を流れる柿崎川を除き、すべての川が関川に合流して日本海へと注いでいます。そのうち、青田川や飯田川、櫛池川などは山間部から平野部へ流れ出る個所に扇状地を形成しており、平野とともに豊かな穀倉地帯を支え

ています。

この平野を取り囲むように、米山山地、東頸城丘陵、関田山脈、南葉山地、西頸城山地などの山々が連なっています。これらの山々は、雪や雨水を貯え大地や海に恵みをもたらしています。日本海に面した海岸線には砂丘が続き、砂丘と平野の間の後背湿地には天然の湖沼群が点在しています。

気候は、四季の変化がはっきりしており、冬季には快晴日数が少ない典型的な日本海型です。大陸からの季節風（偏西風）が日本海を渡り、多量の降雪をもたらします。全国有数の豪雪地帯であるとともに、積雪量が０㎝の海岸部から山間地の４ｍを超える豪雪地まで、変化に富んだ気象環境にあります。

東から南にかけての山々の連なりは、市域の境界であるとともに分水嶺であり、隣接する十日町市や長野県飯山市と水系を別にしています。山々に降り積もる豊富な雪や雨は、山間地に蓄えられた豊富なミネラル等を含む水資源となり、その流れは淡水生物の生存の場や、コシヒカリなど農作物の実りの源として大地を潤します。やがて海に注ぐことによって海洋生物の栄養源となり、豊かな海洋資源を育んでいます。海で蒸発した水は雲となり、偏西風に乗って雪や雨となって大地に降り注ぐという恵みの循環が繰り返されています。

このように、上越市は、海・山・大地に恵まれた自然豊かな地域です。こうした雄大で厳しい自然環境は、豊穣な大地と海や山に恩恵をもたらし、古来より当地の人々の暮らしを支えてきました。

上越市の位置と地勢

【上越市の四季と暮らし】

季節	年中行事など
春	 冬が終わり、春になると乾燥した暖かい南風が吹き、妙高山中腹の「はね馬」や南葉山の「たねまきじいさん」などの雪形が姿を現す。 市民は、長かった冬の終わりを喜び、山菜採りや庭木の手入れなど、到来した春を楽しむ。 穀倉地帯ならではのにぎやかな田植えとともに、市内の至るところで豊作を願う春祭りが行われる。
夏	 じめじめとした梅雨が明けると、亜熱帯に近い夏の暑さが訪れる。30℃を超す真夏日の多さは、九州や四国に近いといわれ、湿気が多い蒸し暑さは高田の夏の風物詩。 日本海に面した砂浜には、市内はもとより他県からも多くの海水浴客が訪れ、にぎわいを見せる。 夏は祭りの季節。直江津と高田をむすんで行われる祇園祭は、八坂神社での御撰米で最高潮に達する。
秋	 実りの秋は台風も多いが、太平洋側ほど大きな被害には至らない。それでも大きな風で稲が倒れ、稲刈りへの心配は尽きない。 稲刈りは家族総出の作業。作業の合間にいただく“こびり”は、格別においしい。数は減ったが、はさ木による天日干しが更に米を美味くする。豊作を感謝する秋祭りが各地で行われるのもこの時期である。
冬	 11 月の終わりごろは霜枯れの時期。「雪おろし」と呼ばれる雷鳴が轟き、あられやみぞれが降る。雪おろしを冬の合図に、急ピッチで進められる雪囲いとともに、人々は冬支度を急ぐ。市民の間では、「南葉山が 3 回白くなると人里に雪が来る」などと言い伝えられている。 雪は生活の一部であり、日本に初めてスキーが伝えられたことも地域性を表わしている。

（３）歴史

■自然・原始・古代

①上越の自然と歴史のはじまり

私達が暮らす上越地域では、かつて人々は現在とは相当に異なる風景の中で生きていました。46 億年というこの地球の歴史の中で、上越地域で確認されている最古の地層は、今から 1,500 万年ほど前の地質学的には新生代（しんせいだい）の新第三紀と、より新しい第四紀と呼ばれる二つの地層からなっています。日本列島の中央を 70～80 ㎞の幅で大きな溝のように横断しているフォッサマグナが新第三紀層です。この地域からクジラや貝類の化石が多く発見されるように、海の底にあった時代の堆積物におおわれているのです。

70 万年前から 13 万年前の中期更新世（こうしんせい）に洪積台地や沖積平野が形成され、いよいよ人類の活動もはじまる旧石器時代に入ります。2 万年ほど前、最後の氷河期が終わり海面上昇による日本列島の縄文海進のころには、ほぼ現在に近い環境に変わります。その後の小海退、小海進があった中で、生活した人々の姿が、現代の遺跡発掘によって明らかになってきました。原始時代以来、自然環境に依存する傾向にあった人々の活動が、近世初頭の高田平野の人工的改変によって大きく変わってきます。福嶋城、続いて高田城、河川の改修、堀の掘削、高田藩による新田開発などがあげられます。

上越の自然を語るとき、植物や動物の分布と変遷は生活環境と直結する問題です。特に注目したいのは、上越地域の地形、つまり日本海に面し北上する対馬暖流による温暖な気候と冬の北西季節風がもたらす多雪地帯であることによる、独特の植物相とそれに関連する動物層が見られることです。雪国特有の植物の一つであるカンアオイは地質時代以来の地域性を残して分布し、そのカンアオイを食するギフチョウがこの地域に限られるという関係などは、注目される一例でしょう。

ギフチョウ

②　上越の縄文と弥生の社会

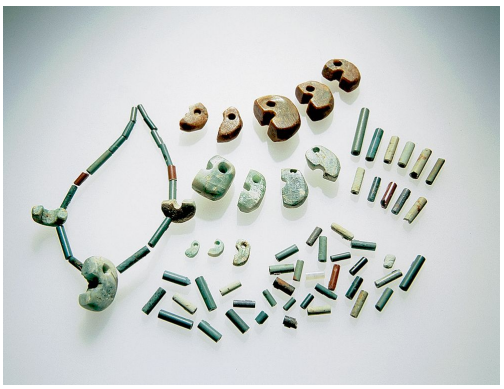
人類が石器を作り始めて以来、土器作りを始めるほぼ 1 万年前までの約 250 万年を旧石器時代と呼んでいます。日本列島においては大陸と地続きの時代でもあり、旧石器時代の遺跡は少なくありません。この上越地域においても、旧石器時代の上越地方の文化は、日本海沿いの日本列島を縦断するルートと中部高地と日本海を結ぶ列島横断のルートが交わる文化のＴ字路に位置すると考

えられています。そこには、「海の道と山の道があう場所」という上越地域の特色がかなり明確に打ち出されていることに注目すべきでしょう。

縄文時代については、草創期は一万数千年前、ちょうど氷河期が終わり、海面が上昇した日本列島化の時期と同じころとみられています。そして温暖化とともに降水量も増え、各地に豊かな森林が生まれ、木の実や動物などが増えてきました。今までに調査された上越地域の縄文遺跡をみると、総体的に海岸・平野部よりも籠峰（かごみね）遺跡（中郷区）や山屋敷（やまやしき）Ⅰ遺跡のような丘陵・山間部が多かったようです。

籠峰遺跡

上越地域の弥生時代について、最近、発掘調査された吹上（ふきあげ）遺跡は弥生前期から古墳時代まで続いた拠点集落です。そこでは玉作りと稲作を行う人々が住みつき、工房をもって管玉（くだたま）とヒスイの勾玉（まがたま）を分業によって作り、中部高地のムラに運び、農産物や山の産物などを手に入れたと考えられています。そこは一度洪水で埋もれながら、住民は 20 年ほどで戻って玉作りを再開したことがわかります。その素材はすべて遠隔地から運び込まれており、本格的で当時の玉作りのトップクラスであったと評価しています。また、吹上遺跡に近接する釜蓋（かまぶた）遺跡は、平地の環濠（かんごう）集落であり、環濠と川が結節していることから川を利用した舟運の拠点、いいかえれば物流基地であったと考えられています。



吹上遺跡で作られた玉類

ここで注目すべきは、玉が運ばれたルートとして日本海沿いの海のルートと並んで関川を遡上する信州ルートが考えられていることです。

かつて倭国大乱（わこくたいらん）の時期に裏山（うらやま）遺跡、斐太（ひだ）遺跡（妙高市）など上越地域にも戦いに備えた高地性環濠集落がつくられますが、これはまさに「越（こし）の国」の軍事施設とみなすべきだという見解が注目されます。

一方、上越地域の原始から古代への歴史的展開を考えるとき、この地域が東アジア大陸から分かれ、日本海を渡って多くの人々が移動した時代と連続しています。今から 10 万年ほど前、東南アジアのスンダ列島から北上した原モンゴロイドが広く東アジアや日本列島に定住し、さらに北上して中国やシベリアに定住した、いわゆる新モンゴロイドは、氷河期が終わるころ南下をはじめ、朝鮮半島や日本列島にも移動します。

こうして、紀元前 300 年ごろの弥生時代に約 8 万と目された列島の人口が、紀元 700 年ごろには 540 万、約 70 倍と爆発的な増加があったとみる説があるほど日本海を渡る大量の渡来人があったことは確かでしょう。大和王権は、いわば新モンゴロイドの日本列島人が築き上げた王権で、天孫降臨にはじまる『日本書紀』『古事記』のいわゆる『記紀』の豊かな神話には、それぞれのルーツの伝統的な文化の痕跡をとどめていることに注目すべきです。

『記紀』で語られる建国神話についても、「天孫降臨」神話は広く東アジアに分布していることが知られ、天から地への「降臨」は、むしろ西から東へといった「民族移動」と考える見方もあります。弥生時代の銅鐸や土器、古墳の埴輪などに示された船の文様は、それを連想させるものといえます。『古事記』や『風土記』にあらわれる「北の海」は、古くから人や物を運ぶ航路とされていたことは、北九州の弥生の壺が柏崎で発掘され、糸魚川のヒスイが北九州で出土し、大陸の百済や新羅の天馬塚の金冠などで発見された見事なヒスイもその証拠といえます。

ヒスイといえば上越地域に住む人々にとって昔から語り継いだ神話として、コシの国の沼河比売と大国主命の婚姻物語が有名ですが、この物語は因幡の白兎の話とともに『古事記』にのみある話で、いろいろな解釈があります。それは、3、4 世紀ごろからの日本海航路の発達のうえに、コシと出雲の交流があったこと、また 5 世紀ごろからの西頸城でのヒスイ工房の存在、さらには親不知の難関を乗り切る海神の性格をそなえた沼河比売の伝承など、この地域にとって重要なことがらに結びついて根強い関心を呼んできたのです。また直江津西方の岩殿山の磐座は、大国主命と結婚した沼河比売が建御名方命（諏訪神）を出産したという伝承をもっています。

この海からの伝承に対し、大彦命の伝承は大和王権による陸からの王権拡張の反映とみられます。しかし、前期古墳の分布が頸城地域にはほとんど見られず、むしろ越後平野、会津盆地に築かれていることから、能登からの海上ルートが考えられます。また北陸地域の国造のほとんどが沿岸の潟港を中心に本拠地をもち古墳をつくっていることも、大和王権の勢力伸長が、海路中心であったことを物語っています。

このように沼河比売の伝承は、国造制が成立した『記紀』以前の 6 世紀ごろには、久比岐のヒスイ原産地に関わる海や河川の伝承として語られてきたと考えられます。

③　上越地域の古代

大和王権にとって 3 世紀から 4 世紀にかけての時期は、「東国」を鎮め、支配することがまさに国是とされていました。その結果『記紀』には応神朝の 5 世紀に東国の蝦夷からの貢献と労役の記事があり、諸豪族の臣僚化が進み、東国も徴税の基盤となりました。その成果が 4 世紀末から 5 世紀初頭、倭国の朝

鮮半島での高句麗との戦いを支えた軍事力であり、また応神稜などの巨大前方後円墳の造営を可能にした経済力でした。

頸城国造を中心とする兵力も、朝鮮半島への出兵や補給の兵站線の役割を担っていたのです。太平洋側の坂東以北の国造たちが、もっぱら征夷の役割を果たしたこととは対照的な地域的特色を示しています。

大和王権の 5 世紀は有名な倭王武の上表文や埼玉県、熊本県の古墳出土の刀剣に刻まれた銘文から、雄略天皇の支配領域が関東から中九州に及んでいたことが知られます。そして、6 世紀には地方豪族はその地域の国造という地方官にまとめられます。また、北陸道方面では史料的に 13 の国造が知られますが、そこには久比岐国造と高志深江国造が含まれています。

越の国も 7 世紀半ばまでは国造のもとに評がおかれ、阿賀野川以北には蝦夷が勢力をもっていました。7 世紀末には越前・越中・越後に三分割され、初めて越後国が成立しますが、頸城郡はまだ越中国にあり、大宝 2 年（702）になって越中 4 郡（頸城郡・古志郡・魚沼郡・蒲原郡）が「越後」に編入されます。和銅元年（708）から同 5 年（712）の間に越後蝦夷や陸奥の蝦夷と戦うなかで出羽国を建国させ、越後国の領域が確定したのです。

越後国は、新しい出羽国を支えると同時に津司を置いて、北方の蝦夷や靺鞨との政治的・経済的交渉を行い、使節派遣も行っていました。したがって、越後国府は、はじめ阿賀野北部にあり、出羽国が安定した 8 世紀初頭、頸城郡に移動しました。国府所在地は、諸説ある中で現在の上越市今池遺跡が有力と見られています。また、国府に付属して設置された国分寺についても、今池遺跡に近接する本長者原廃寺が有力視されています。

④　古代の頸城の人々のくらし

頸城郡は、越後国の中で最大の郡で人口も多く、全 34 郷中の 10 郡からなっています。1郷は50戸とされ、人口の多いところではいくつかの郷がかたまり、人口の少ないところは広い地域にわたって 50 戸分がまとめられたものです。

宮口古墳群

頸城平野の東西に連なる丘陵の裾や、平野を流れる河川の自然堤防及び河岸段丘の上に家々が分布し、耕地は条里制地割がなされていました。近年の発掘では木簡や墨書土器が数多く出土し、その中にはこの地域に住んでいたと思われる人々の名前が登場します。

この地域の集落は本来、辺境防備のために 6 世紀ごろから中央の物部系氏族が進出して成立したもので、高田平野の飯田川、櫛池川の上流付近に集中する宮口・水科古墳群や集落遺跡はそれを物語っています。上越市に広がる沖積平

野には条里型地割の遺構が小字名などとともに残存しますが、これらは 8 世紀半ば以降にあらためて整備されたとみるべきでしょう。生産の面では農耕を中心に須恵器作りや鉄の生産、また、海岸では塩の生産も行われていました。

8 世紀半ばに有名な墾田永年私財法(743 年)が出されると、早速に頸城地方でも東大寺や西大寺が開発をはじめ、荘園を作ります。墾田開発や鉄器の利用などから、農民の貧富の差は地域社会を動揺させてきました。調庸の納入の遅れ、未進が中央政府による国司の責任追及となり、国司の受領化も進みます。

この地域に展開した西大寺や東大寺領の荘園もその支配の実権を握っていたのは有力豪族で、現在の上越教育大学前の江向遺跡で 10 世紀後半の大型掘立柱建物とともに出土した「高有私印」と刻まれた銅印は、高志公とでもよばれたであろう豪族のイメージをかきたてるものでした。

江向遺跡出土「銅印」

⑤　上越地域からみた律令制の動揺

8 世紀から 9 世紀にかけて律令制の地方支配は大きく動揺し始めました。中央政府は、国司に対してその責任を追及し、また、国司の交替に際し勘解由使をおいて監督を厳しくしています。地方政治では、富豪層が政治機構に入り込み、国書生などの書記の係も次第に発言権をのばし、在庁官人層を形成していきます。

このような土着貴族と国司が対立する場となった平将門の乱がありますが、越後においても延喜2 年（902)、土着貴族によって暴行をうけた国司の例が、都に知られています。これがのち「越後の風」として在地勢力が横暴な国司を告発するモデルとなって広がったのでした。

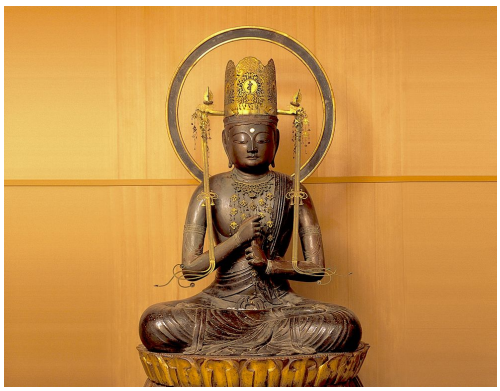
11 世紀後半には在庁官人による地方行政の円滑化によって、国司自身は在京のまま任国へ下向しない（遙任）で、代理人である目代を派遣しています。越後でも天喜5 年（1057）藤原成季は国司が交替しても、目代を続け、その後目代二人が置かれ、その下で有力な在庁官人が活動しました。

11 世紀末は院政が始まった時代でした。京都の上皇たちは、院の御所や寺院の造営を計画し、それを貴族たちに請け負わせ、そのかわりに知行国を与えたのです。12 世紀には院の近臣藤原家成の子息 3 人が次々と越後守に任ぜられ、新しいタイプの中世荘園が続々とつくられます。越後国は、農業に加えて貴族好みの高価な越布（青苧で織った布、越後上布ともいう）を産出するので、貴族たちに好まれた国でした。

広い越後には国司の目代が 2 人置かれたこともあります。目代のいる留守所の周辺には、在庁官人たちが武力を蓄えていました。12 世紀末、源平の争乱

（治承・寿永に内乱）のころは越後の国衙と激しく対立しながら、越後北部の摂関家領荘園の実質的経営者として登場した越後城氏が勢力を拡大しています。このような越後での 12 世紀の荘園の驚くべき消長盛衰の中に、摂関家や院政権力の強引な経済的基盤拡大の実態をみることができるでしょう。

また、この時期には三郷地区にあった越後国府が、海岸部の五智周辺に移動したと考えられます。いわば港町が政治拠点を吸収する形ですが、このことを裏付けるように、承元元年（1207）に越後国府に流罪となった浄土真宗の開祖・親鸞は、居多ヶ浜に上陸し、現在の国分寺境内にある竹ノ内草庵や国府別院が建つ竹が前草庵などの旧跡が残っています。あわせて国分寺も移動したと考えられており、最近の研究では五智西方の岩殿山で発見された山岳寺院跡が有力視されるようになりました。岩殿山大日堂には平安後期の「木造大日如来坐像」（国重要文化財）が現存します。


木造大日如来坐像

■中世

① 鎌倉・室町時代の越後

鎌倉幕府権力が急速に広まった原因は、幕府に敵対した武士の所領を没収し、そこに東国の源頼朝の御家人を地頭として任命し、全国各地の荘園公領に支配を拡大していったことにありました。上越地域でも９人の地頭たちは、いずれも越後国以外のいわゆる東国出身の武士たちで、越後全体をみても越後出身は１人もいなかったほど徹底した東国御家人重用政策でした。

また、越後国御家人は極めて少ないことが指摘されていますが、それは平氏の血をひく城氏や木曽義仲の没落と関係があるとみられています。しかし、越後の知行国主は将軍となった頼朝が朝廷に返上したのちも、代々親幕府派の貴族に相伝されており、越後国の位置の複雑さを示しています。

例えば、承久の乱のときは後鳥羽上皇の近臣藤原秀康の知行国であったことや、反幕府の最初の挙兵が越後の北部加地荘の願文山だったことがあります。一方、幕府軍にとっても越後は重要な地であり、北陸道方面軍の結集地は越後府中でした。そこから進軍し、越中国境の親不知や市振で、京方の軍と戦っています。つまり、越後は両軍ともに戦略拠点と考えられていたのでした。乱後は再び将軍知行国となり、国司は北条氏一族の持ち回りとなって越後支配を続けますが、一族中の名越氏が得宗家と対立しながらもその存在を明らかにする活動を行っています。

鎌倉幕府を倒したのち、後醍醐天皇による天皇親政が復活しました。後醍醐天皇は、地方政治において国司を復活させ、国司が守護と併置されました。越

後国司となった新田義貞は、建武新政府の方針により越後国内の旧領主たちの知行を安堵する「国宣」を出しました。その後も越後の南朝勢は、国府を中心に集結し、越前にも進出するなど積極的に活動しています。

建武3 年(1336)、足利尊氏は武家政治再興を目指し、室町幕府を開きました。新政権の中心は京都にあり、関東経略のために派遣された上杉憲顕は広範囲にわたって軍政を敷き、さらに越後の残存する南朝勢力を討ったことから、その後の越後国と上杉氏一族との深く長い関係がはじまります。14 世紀後半、合戦の続くなかで憲顕は、幕府から強く望まれて関東管領の地位に就き、上野と越後の守護を兼ねながら、日常は鎌倉に居住していました。京都との往復が多いなか、鎌倉での上杉氏は、室町幕府との関係もあり複雑な動きをとりました。越後守護上杉氏と守護代長尾氏の体制のもとで、明徳2 年（1392）南北朝合体を迎えます。

室町期の守護は、鎌倉期の守護の幅広い権限を受け継ぎ、さらに荘園・公領の本年貢の半分を得る半済の権限など支配権が浸透していきました。幕府権力の安定とともに有力な守護は京都に常住し、本国の守護所に守護代などが置かれました。越後の府中も納入物を保管する倉庫群や職人の工房、住居などが集まりました。

15 世紀半ばになると幕府と地方との関係にひとつの大きな変化が現れました。それは税のかけ方が耕地の広さごとに課した段別賦課方式から、1 国単位で 1 律に 100 貫文を賦課するという方式に変わったことです。それは守護に一国の支配を完全に任せるようになったことを意味します。越後では守護であった上杉房定がそれを納めています。

上杉房定は京から越後に戻り、守護代長尾氏から実質的支配権を奪い、そのまま在国して勢力を強め、その活躍は、鎌倉はもちろん京都にまでよく知られていました。上杉氏の権力機構もこの時期に整い、成長してきた新・旧の領主たちを抱えこんで、守護を中心とした領主連合権力として、のちの戦国大名の政治構造の原型を作りあげたのです。越後の戦国時代はここから始まったとみています。

② 府中文化の開花

政治的伝統と商業・交通上の発展をうけて、越後守護上杉氏は、現在の直江津駅周辺（伝至徳寺跡）に守護所を定めました。また隣接して上杉氏の菩提所であるとともに迎賓館である至徳寺（のちに十刹に列せられる）を創建したと考えられています。

守護所を中心としたこの地域は「府中」と呼ばれ、とくに京都から越後へ戻った守護房定の時期には、ここ府中にすぐれた文化が花開きました。この時期、府中には管領細川政元、歌人の冷泉為広や堯恵、連歌師の宗祇と宗長など多くの人々が訪れ、禅僧の万里集九は『梅花無尽蔵』という漢詩文集を残していま

す。府中文化は当時の都である京都との交流の上に成り立っていました。

長享2 年（1488）、府中安国寺の塔頭　在田庵は、朝鮮から仏教聖典をはじめとする教典の集大成である「高麗八万大蔵経」を求めています。越後府中は京都だけでなく、海を越えて朝鮮半島や東アジアまでつながっていました。府中文化は、京都と結びついた最先端の文化だっただけでなく、国際性をも兼ね備えていたのです。

1992 年から 94 年にかけて行われた伝至徳寺跡の発掘は、それを考古学的に裏付けるものとなりました。遺跡から出土した陶磁器類には、日本海交易でもたらされた日本国内産のものだけでなく、白磁や青磁などの輸入陶磁器も数多く含まれていました。

至徳寺跡　出土遺物

③　上杉謙信の時代

上杉謙信は享禄3 年（1530）、越後守護代長尾為景の子として生まれました。はじめ虎千代、のちには景虎を名乗って、少年時代を春日山の林泉寺で過ごしたといわれています。兄晴景に代わって 19 歳で守護代長尾家を継いで以来、春日山城を本拠に活躍しました。景虎は領内の不安定な状況を治めるために、室町幕府に工作して高い格式を認められ、実質的な越後の支配者としての権限を得て、国内統治を目指しました。

折から関東管領上杉憲政と北条氏康、武田信玄や今川義元らが群雄割拠の争いのなかにあり、上杉憲政が敗色濃厚の状況から脱出しようと、越後の長尾景虎を頼ったのは天文21 年（1552）でした。景虎は大きな館（御館）を造営して憲政を厚遇しています。また、武田信玄と北条氏康との同盟によって越後との対立が深まってきました。

この年、中央への工作が成功し、弾正少弼の官途と従五位下の位階をうけ、国内外に対して大きな影響力をもったのです。翌年 1 回目の川中島合戦を終えて、この官職授与に対する御礼を名目に初めて上洛します。朝廷・幕府からおおいに歓迎され、後奈良天皇に拝謁して天盃と剣を賜っただけでなく、越後と隣国での敵対勢力を討伐する権利を与える綸旨が出されたことなど重要な意義をもった上洛でした。

林泉寺惣門

ところが弘治2 年（1556）、景虎は突然引退を決意したのです。そ

の狙いは極めて政治的なかけ引きとみられています。しかし、案の定、家臣たちは景虎の立場の重要性に気付き、引退を引きとめたことで、家臣団の再結集が図られました。景虎の深慮遠謀とみられます。

十分な準備を重ね、永禄元年（1558）に二度目の上洛が行われました。5000 人という大規模なもので、その華やかさや数か月におよぶ滞在などで、京都に強い印象を残し、正親町天皇や将軍足利義輝の厚遇を得ています。帰国した景虎に対して領内そして周辺の有力諸将は太刀を献じて、関東の北条氏や武田氏らに対抗する勢力を形成しています。

永禄 3 年（1560）、北条氏康に圧迫された関東の諸将の要請に応えて越山した景虎は、翌年には越後と関東の連合として鎌倉から進み、小田原城を包囲しています。この勢いにのって永禄 4 年（1561）、関東諸将の推戴をえて、上杉憲政から山内上杉家の家督と関東管領職を譲られ、上杉政虎と名乗り、鎌倉の鶴岡八幡宮で就任式を行いました。さらにこの年のうちに将軍義輝の一字をうけ、名乗りを輝虎とかえています。

関東管領となった輝虎は、関東進出を繰り返し行いました。それはほぼ年末に越山し、雪の少ない関東で冬を過ごし、翌年春に帰国するというパターンでした。農繁期になると軍隊を引きあげるなど、兵農未分離の軍隊の弱い性格がのぞかれます。このような輝虎の関東征圧は極めて不徹底なもので、彼が城攻めで勝っても越後に引き上げると北条氏や武田氏は再び諸将たちを攻撃し、輝虎側から自分の側に寝返らせています。

結局、永禄 6 年（1563）から永禄 11 年（1568）の間に、北条・武田の同盟軍によって関東における上杉輝虎の支配地は総崩れとなって、事実上関東から撤退しています。さらに揚北衆の有力者、本庄繁長が武田信玄と結んで兵を挙げ、輝虎はこれまでにない深刻な危機を迎えたのでした。

この時期の武田・今川・北条・本庄、そして家康・信長と上杉氏をめぐる遠交近攻政策や同盟と敵対の関係はめまぐるしく変化しましたが、まったく驚くべき変化は、敵対していた北条氏が上杉氏に同盟を申し入れたことでした。

この同盟の交渉は輝虎の主張を北条氏康が受け入れる形で進行しました。領土についても伊豆・相模・武蔵の三国を北条氏、輝虎は上野・武蔵の二国を主張し、結局、北条氏が譲歩したかたちで越相同盟が成立したのは永禄 12 年（1569）5 月でした。

武田氏の西上野進出のなかで、氏康が期待していたのは、輝虎の信州出陣によって、武田氏への牽制をかけることでした。しかし、輝虎は越相同盟によって関東口の脅威がなくなったので、8 月には越中方面に出陣していたのです。甲州勢に悩まされた北条方は再三輝虎の越山を要求し、上杉軍は雪のなかを進軍して北条氏を歓喜させたこともあったのですが、輝虎は信州に入らず反対の下野佐野を攻めました。

北条氏の苦しい立場を訴えても、実は輝虎はもう徳川家康と連携し、武田を

共通の敵とする方向に進んでいたのでした。そのために北条は軽視されたと感じたのでしょう。北条氏からの要求にまったく応えなかった輝虎への不信感から越相同盟は氏康の死によって一方的に破棄されました。

関東の諸氏たちは越相同盟が消えたあと、またも勢力関係・友好・盟約関係を新しく作り出していきます。このころ輝虎は剃髪して謙信と称します。この間、謙信の関心は越中・加賀・能登方面に集中しており、元亀 3 年（1572）には謙信から持ちかけて織田信長との同盟が成立しています。同 4 年（1573）、武田信玄の急死によって上杉勢は戦局を打開し、越中を平定しました。

天正 5 年（1577）、謙信は能登に進出して苦戦の城攻めの末に七尾城を落とし、ついに信長と北陸で接することになります。謙信は敗走する織田勢を追撃し、加賀の湊川で織田軍を撃破しています。春日山城に戻った謙信は、まず関東平定を実現しようと年末に武将の動員名簿を作成し、翌 6 年（1578）正月、陣触れを行います。3 月 15 日を進発の日とまで定めたのですが、出発を目前にした 3 月 9 日、脳溢血で倒れ、意識不明のまま 13 日に永眠したのでした。

④　御館の乱と上杉景勝の活動

上杉謙信の死後、養子景勝は謙信の遺言と称して直ちに行動をおこし、春日山城の本丸を掌握します。そして、御館（前関東管領上杉憲政の居館）に立て籠もった養子上杉景虎と戦いとなりました。上越地域が激しい戦場となった御館の乱です。

はじめ景虎有利に見えたなかで、景勝は、景虎を援けるために攻めて来た武田勝頼へ、大胆にも和睦を申し入れたのです。6 月には、黄金 50 枚を贈ること、東上野の上杉領と信濃飯山領を割譲すること、勝頼の妹を景勝の妻とするという、景勝側に一方的に有利な条件で甲越同盟が結ばれました。

天正 7 年（1579）3 月、景虎が鮫ヶ尾城で自刃すると、景勝は、抵抗する上越・中越の旧家臣たちを撃破して体制を確立しました。翌年、三条・栃尾の仕置きを終え、約 3 年にわたる戦乱が収束しました。このころ畿内を中心に強大化した信長の勢力に圧迫されていた景勝は、天正 10 年（1582）6 月 2 日、越中の拠点である魚津城を落とされ、最大の危機を迎えました。しかし、翌日には本能寺の変がおこり、かろうじて救われたのです。

こののち、景勝は羽柴秀吉に接近し、ついには上洛して秀吉に臣従の札をとり、従四位下・左近衛権少将となりました。秀吉は景勝を、謙信とは違う一徹な律儀者のようにみて活用したといわれています。こうして豊臣大名となった景勝には、次々と活躍の場が与えられました。

秀吉の権力を背景に対抗していた旧族の新発田重家を滅ぼし、景勝が越後統一を実現したのは、天正 15 年（1587）でした。翌年、再び上洛して、従三位・参議に叙任され、秀吉から在京賄料1 万石を得ています。天正 18 年（1590）、いよいよ秀吉の小田原征伐に参陣、そのまま出羽の太閤検地などに従事しまし

た。このときには出羽庄内三郡を領地としました。文禄の役には朝鮮の熊川に出陣し、帰国すると伏見城外堀普請に 4000 人という相次ぐ動員がかかっています。

また、上杉氏としては家臣団統制のために必要な全家臣団の知行高を調査したのは、文禄 3 年（1594）のことでした。それは「知行上納覚」という各領主の支配地の村々での年貢高を石高で記したものを申告させ、そのうえで文禄 4 年（1595）、越後太閤検地が行われたのです。この文禄検地をうけて描かれたのが、この時期の絵図として全国でもわずかに二敷しか現存しない大型絵図『越後国郡絵図』でした。

上越地域にあたる『頸城郡絵図』では、当時の確定された町村が 377、知行人の数が 117 人と散らばっています。それは、景勝の直轄地が「御料所」として集中しているからなのですが、ほかには柿崎氏の知行地が目立っている程度でした。

慶長 2 年（1597）、2 度目の朝鮮出兵のための検地が行われ、文禄検地とくらべ、2 倍近い打出高となっていました。また家臣団に対応した知行地の再編成も行われています。

こうして見事に戦国大名から豊臣大名への転換をとげた上杉景勝は、文禄 3 年（1594）、権中納言となり、慶長 3 年正月越後をはなれて会津へ国替を命ぜられ、120 万石を与えられました。そして豊臣家の五大老の一員に列することで、謙信の実現できなかった野望を次第に実現していったのでした。

■近世

① 近世における上越の藩政と地域文化

関ヶ原の戦い以降、徳川氏の統一権力が強化される中で、かつての上杉領国を引きついだのは織豊大名の堀氏でした。堀秀治は、慶長 3 年（1598）越前北ノ庄城から春日山城主として入封します。入封後まもなく秀治は、関川河口右岸に新たに福島城の建設を進めましたが、生前には完成せず慶長 12 年（1607）嫡子忠俊の代にようやく完成しました。

しかし、堀氏は家督争いから改易となり、家康の 6 男・松平忠輝を新たな越後の領主とする 45 万石（一説に 60 万石、75 万石）の徳川一門大名が成立しました。慶長 19 年（1614）松平忠輝が幕府の「天下普請」の名のもと新たに築いた高田城とその城下町は、それまでの春日山城下や福嶋城下とは異なり、中世的伝統を断ち切った典型的な近世

復元された高田城三重櫓

都市として計画されたものです。

高田は、武家屋敷や町屋、寺町など城下町としての町割りが整備されるとともに北国街道の宿駅として栄えました。とりわけ城下の西側に南北 2 列に配置された寺町は、今でも 66 か寺が甍を並べる全国的にも稀な地区として貴重です。なかでも親鸞ゆかりの寺院である浄興寺の本堂は、市内の建造物で唯一、国重要文化財に指定されています。また、町屋に付属する雁木の町並みは高田が発祥とも言われ、総延長 18 ㎞（直江津地区含む）は今でも全国一の長さを誇っています。幕藩体制のもとで幕末まで続く高田藩政は、すべて高田城を中心に展開したのでした。

雁木が残る高橋あめや

しかし、元和 2 年（1616）、忠輝改易後、高田藩の政治的位置は次第に低下していきました。それは戦国期の一国一大名型が、幕府権力によって分割される過程であると同時に、親藩大名領が譜代大名領となり、さらにその間隙をぬって幕府直轄領が拡大してゆく過程ともいえます。

上越におけるその転換期の一つとして、松平光長26 万石による 58 年間に及ぶ支配をあげることができます。後世まで「最盛期の高田城下」と評価される豊かな歴史的イメージは、この寛永から天和に至る光長時代に形成されたものといわれます。こうしたイメージは、松平光長が徳川一門であり、御三家につぐ格式から、「四家」とよばれるほどの大国意識があったうえに、寛文5 年（1665）の地震をはじめとする数々の災害を乗り越え、さらに、頸城平野を貫く大規模な用水を開削することによって広大な新田の開発に成功し、これを背景に城下町高田を経済的繁栄に導いたことなどによるのでしょう。

その後、領主は稲葉家、戸田家、久松松平家へと譜代名門がつぎつぎと交替しますが、格式も財力も 10 万石前後となり、有力な稲作地帯である刈羽郡、魚沼郡や頸城郡東部は幕領に組み入れられてしまいました。この間に生じた頸城質地騒動においては、時の領主松平定輝の厳しい弾圧がありました。

もうひとつの高田藩のイメージとして、寛保元年（1741）、姫路から入部した榊原家のことがあります。領主交替の激しかった高田藩も、15 万石の榊原家が明治維新まで、6 代・130 年に渉って続き、地域の人々には「高田の殿様」として親しまれてきました。徳川四天王と謳われた家柄とはいえ、厳しい財政状況への対応に苦慮し、動揺する高田藩は、さらには幕末の動乱に翻弄されることになるのです。

② 「文化と交流」にみる地域文化

近世に入ると、大坂を中心とする全国的な商品流通が発展し、日本海航路の隆盛、陸上の街道の整備とあいまって、活発な物と人の交流がみられるようになりました。松平光長の時代には、藩経済圏の統制を図るために多くの口留番所が置かれましたが、その改易後は藩領が縮小され、幕府領が大幅に入り込んで統制や保護が困難になり、城下の経済を脅かすようになります。

上越地域から江戸や大坂に向けての廻米は、17 世紀には年 20 万俵といわれました。その後貨幣経済の進展とともに年貢が金納化された分、廻米は減少し、19 世紀には 11 万俵ほどでした。西廻り航路が開発されると直江津は北前船の寄港地として繁栄し、それに連なる物資の流通網が浦々から内陸部にできあがっていきます。一方、上越地域の文化は、このような経済的発展と深く結びつき、上方や江戸の文化と直接交流する人々が多く、レベルの高いものと評価されています。

■近代

① 日本の近代における上越

明治維新は東アジアの日本が、19 世紀後半、ペリーの来航を機に急速な変化をとげ、徳川幕府を崩壊させて、近代国家を作り上げることに成功した一大変革でした。

しかし、そのわずか 20 年ほどの間に政局は、尊王攘夷から倒幕へと転換し、さらに大政奉還した幕府に対する王政復古のクーデターは、新政府軍と旧幕府軍との戊辰戦争へと目まぐるしく展開したのでした。

高田藩でも藩主榊原政敬を中心に徳川家の存続を願い、また朝廷に対しては勤皇の態度をとるというあいまいな立場をとっていました。それが戊辰戦争を通じて新政府軍の先鋒を務めることとなり、勤皇の立場を明らかにします。それでも、江戸藩邸にいた一部の藩士による神木隊のような反政府の動きもあり、まさに混乱の中で明治維新を迎えました。その明治政府の方針は、欧米列強諸国に対抗できるような強い経済力と軍事力をもった国づくり、すなわち富国強兵政策です。そのために維新の三大改革とよばれる学制の公布、徴兵令、地租改正が相次いで行われ政府が先頭に立って殖産興業そして資本主義化が進められました。

② 上越の「近代」の特質

上越地域が近代国家システムに巻き込まれた明治初頭から殖産興業、富国強兵政策そして立憲国家をめざす展開の中で、特に政治の動向から注目されたことは、日本の近代史に有名な「高田事件」に象徴される自由民権運動の動向です。頸城地方に高まった民権運動は、全国的にみても先進的な青年民権運動として一つの拠点となっていました。

日本の近代史が前近代史や現代史と異なる最大の特徴といえるのは、「戦争」の連続の時代であったということです。この上越地域においても戦争は、市民生活と密接に結びついていました。壬午・甲申事変などの朝鮮問題に端を発した日清戦争には、開戦前から旧士族がまとまって従軍を志願し、義勇軍を提案するなど政府の一方的な情報に踊らされ、戦争熱が高まっています。日露戦争に関しては、とくに日清戦争の 4.5 倍、100 万を超える兵力動員と 8 万という戦死者は、国民生活を脅かしました。

ところが日露講和条約締結間もない明治 38 年（1905）9 月、高田町会は、師団増設のための誘致運動を可決しました。それは好戦的風土ということではなく「寂れゆく旧城下町」を再生させるための一つの選択であったことは明らかです。

明治 41（1908）11 月、第十三師団の入城は、新しい軍都高田の出発となったのです。現在、「日本三大夜桜」の一つに数えられる高田城跡の桜は、師団の誘致を祝って植樹されたものです。

また、上越地域の風物詩ともなっている「高田の朝市」も師団に生活物資を調達するために始められたものです。

金谷山にたつレルヒ像

さらに、第十三師団の第 3 代師団長の長岡外史は、スキーに対し深い理解を示していました。軍事面への運用だけでなく、冬季間の運動として雪深い当地に最適であるとしてオーストリア・ハンガリー帝国から視察にきていたレルヒ少佐に、明治 43 年（1910）スキーの指導を依頼したことが契機となり、日本スキー発祥の地といわれるようになりました。

つぎに産業経済の動向からみると、直江津では全国に先駆けて近代日本の交通の中枢とされた鉄道が整備されました。明治 19 年（1886）に直江津～関山間(信越線)、明治 31 年（1898）直江津～新潟間（北越鉄道)、大正 2 年（1913）北陸本線が全線開通し、大型輸送が可能となりました。

また新潟県は、「地主大国」といわれたこともあるように、蒲原地方を中心に明治 10 年代のいわゆる松方デフレの下で、大規模な土地集積を進めた大地主が多かったのです。それに比べて上越地方の地主は、すでに近世後半までに基本的な土地集積を済ませており、近代に入ると土地拡大によりむしろ停滞・衰退していった地主が目立っています。そういう地主の中には政治活動に進出していった人が多く、まさに豪農層により民権運動や政治活動がリードされていったと考えられます。

また、上越地域は米どころとして知られますが、近代に入ってからの農業生産がきわめて先進的であったことが注目されます。例えば中頸城郡の村々では早くから農業用モーターの利用が進み、中央のモーターメーカーと地元の農機具商とが提携して、いろいろな農耕用モーターが実用化されています。

さらに地元の電力会社が電力供給を引き受けたので、農業と工業そして電気エネルギーが一体化して、昭和初期から日本一の電化による農村として生産力を高めたのでした。農業における近代化がまずこの上越地域において成功したという歴史的事実を、私たちは誇りをもって語り伝えたいものです。

かくて激動の近代も 80 年近くの歳月を経て新しい日本を迎えることになりました。

■現代

「戦後」を読み解くための視点の一つとして、戦後史の出発点となった昭和 20 年（1945）8 月 15 日の昭和天皇による国民に向けた戦争終結の放送があります、それは太平洋戦争の終わりと同時に実は日本の近代史が行きついた一つの到達点でもあったということです。戦争における大きな犠牲の上に戦後の復興・民主化・成長そして半世紀にわたる平和が築かれたことを改めて心に刻んでおくことが大切でしょう。

さらに、経済や労働そして教育の改革など戦後改革の成果が、昭和 30 年代からの経済・政治・社会の発展を促進しました。そして、高度経済成長政策による設備投資や技術革新の波が、直江津港改修とともに重化学工業中心の臨海工業地帯の発展に直結することになります。

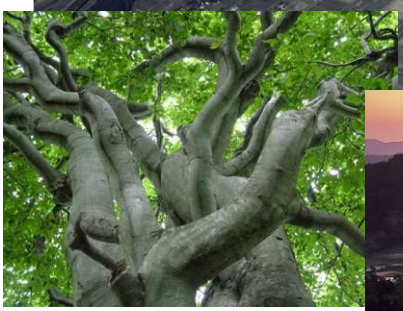
上越地域でも経済成長や教育水準の高まりなどという形で、戦後の夢であった「貧困からの脱出」に成功するとともに、昭和 46 年（1971）、高田・直江津両市の合併による上越市が誕生しました。

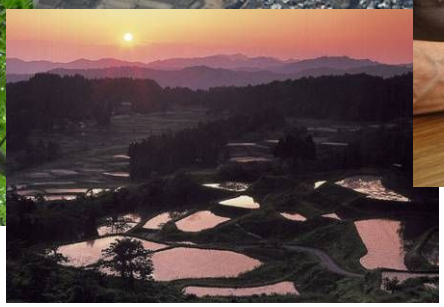
さらに、平成 17 年 1 月には、地方分権時代の到来をうけ、上越地域 14 市町村（上越市、安塚町（やすづかまち）、浦川原村（うらがわらむら）、大島村（おおしまむら）、牧村（まきむら）、柿崎町（かきざきまち）、大潟町（おおがたまち）、頸城村（くびきむら）、吉川町（よしかわまち）、中郷村（なかごうむら）、板倉町（いたくらまち）、清里村（きよさとむら）、三和村（さんわむら）、名立町（なだちまち））が合併して新しい上越市が誕生しました。

＊本文は、上越市史編集委員長　加藤章氏が書かれた下記から一部改変して引用しました。

① 『上越市史』（通史編１　自然・原始・古代）「上越の自然と歴史のはじまり」
② 『上越市史』（通史編２　中世）「新しい上越中世史としての通史編「中世」」
③ 『上越市史』（通史編３　近世１）「豊かな頸城の大地に生きた近世の人々」
④ 『上越市史』（通史編４　近世２）「近世における上越の藩政と地域文化」
⑤ 『上越市史』（通史編５　近代）「日本の近代における上越」
⑥ 『上越市史』（通史編６　現代）「「戦後」からの出発」

日本海
海岸砂丘
直江津港
福島城跡
北陸自動車道
春日山城跡
高田城跡
関川
釜蓋遺跡
古墳群
北陸新幹線
南葉山
（西錦城丘陵）
青田川
青田川扇状地
吹上遺跡
矢代川
上信越自動車道





上越市の歴史と文化

１－２　地域的特性

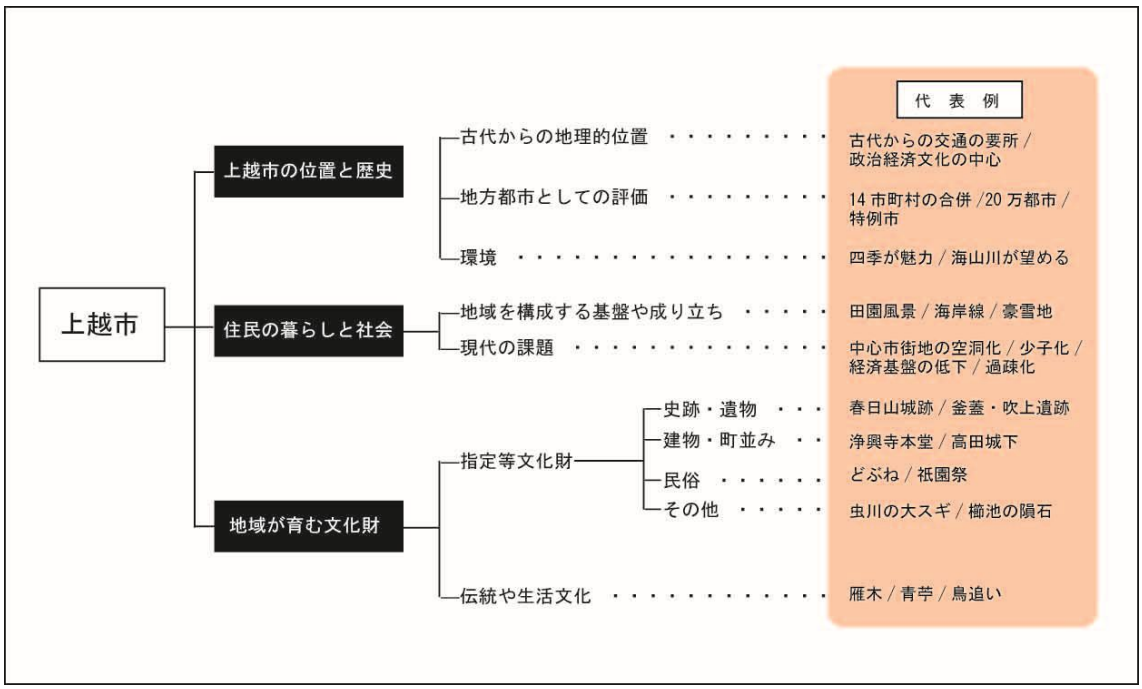
上越市は、海・山・川などの多種多様な地理地形と、はっきりした四季をもつ、バラエティに富んだ自然環境を有しています。それらは一見すると個々に存在するようですが、水の循環などにより結び付けられ、互いに関係しあっている一つの世界であるといえます。

また、縄文、弥生、古墳、古代、中世、近世、現代へと続く歴史には、籠峰（かごみね）遺跡や吹上（ふきあげ）遺跡、釜蓋（かまぶた）遺跡、宮口（みやぐち）古墳群（こふんぐん）、水科（みずしな）古墳群（こふんぐん）、国府（こくふ）・国分寺（こくぶんじ）、春日山城、福島城、高田城、城下町高田・直江津今町など、歴史の教科書に載るような各時代を代表する文化財が途切れることなくそろっており、凝縮した日本の歴史を随所に見ることができます。

つまり、空間的、時間的な軸を考えた場合、上越市は一つのもの、連続したものとしてとらえることが可能であり、上越市をひとつの大きな“かたまり”としてとらえることができます。

こうした地理的、歴史的な背景のもと、地勢や気候など地域が元来備えている自然条件から得られる「国内有数の稲作地」や「良好な漁業地」などの生活基盤を基礎にして、354 件の指定文化財をはじめ、多くの文化財が今に残されています。

また、原始古代から近代までの歴史の中で、交通・流通の要所であったことに加え、食糧自給など豊かな生産力を背景に、越後の政治、経済、文化の中心であった地域色を含む文化財も多く残されていることが特徴といえます。



上越市の地域的特性